

ワークショップ 「構文ネットワークの可能性と課題」

企画／司会／発表： 尾谷昌則 (法政大学)

発表： 井本 亮 (福島大学)

発表： 志波彩子 (名古屋大学)

発表： 貝森有祐 (東京大学大学院)

1. ワークショップの趣旨

伝統文法の時代から存在する「構文(Construction)」という概念は、認知言語学における統語論の研究にとって欠かせない存在になっている。しかし、構文ネットワークに関する研究は意外に少なく、曖昧にされてきた点もある。例えば、構文の意味が特定の語彙意味（例えば、動詞の意味）に帰することができるのかどうかという問題がある（問題①）。同じ構文カテゴリーに属する下位構文同士のネットワーク（Lakoff 1987, Goldberg 1995 など）では様々な構文リンクが紹介されているが、それらの理論的提案と具体的な言語現象の分析がどのように接続するのか（問題②）。さらに、Goldberg(1995)は自動詞移動構文が移動使役構文から動機付けられていると分析しているが、形式が異なる構文に動機付けの関係を認めるべきかという疑問もある（問題③）。本ワークショップでは、以上のような点について考える一助となる事例研究を提示しながら、構文をネットワークとして分析することのメリット・デメリットについて積極的に議論する場を提供する。

2. ワークショップの構成と発表内容

1 趣旨説明 (5 分)

2 「ル動詞を構文論の観点から見直す」 尾谷昌則 (20 分)

「コピーをとる／コピーする」を「コピる」のように短く表現する事例について取り上げ、前述の問題①と②について考える。こういった表現は「る動詞」と呼ばれ、特に若者言葉において顕著に見られる省略表現とされるが、実際には、必ずしも省略ではない。例えば「日和見を決め込む」を省略すると「ひよむ」になるはずだが、実際には「ひよる」となる。これは「○○る」という構文スキーマが定着している証左であると言えるが、一方で、この構文ネットワークを考えようとすると問題が生じる。下位構文としては、「目的語＋る」（メモる）、「状態＋る」（パニックる）、「オノマトペ＋る」（ボコる）、「手段＋る」（タクる）など様々なものが考えられるが、本発表では、こういった下位構文は、単に語彙や品詞を基準にして後知恵的にパターン化しただけであり、下位構文として十分に定着しているかどうかを議論せずに、安易に下位構文とそのネットワークを想定するのは早計であると主張する。

3 「感情感覚形容詞の構文間ネットワーク：話者認識タイプを中心に」 井本 亮 (20 分)

「風が心地よく吹く」「枯れ木が寂しく立っている」のような〈話者認識〉の読みを持つ形容詞連用修飾の事例を取り上げ、構文構成の観点から分析する。この事例は情態概念として話者の認識を参照する点で、情態修飾とも評価注釈成分とも異なる固有の特徴を持つ。形容詞に関する先行研究ではこの読みについて、十分に分析の射程に収めることができていない。そこで本発表は、以下のような分析・主張を展開する。(1)感情感覚形容詞の述部／連用修飾は形容詞を核とする構文・用法間のネットワークを構成している（問題②）。

(2)話者読み【デキゴトに内在する意味領域のサマが〈話者に喚起された感情感覚〉で表されるサマである】は複合的・構成的な読みであり、これは連用修飾の機能的動機と感情感覚形容詞のネットワーク構成によって得られる。さらに主体化(subjectification)もこの構成に関与している可能性がある(問題③)。このように、構文(間)ネットワークによる分析を採ることで形容詞の性質だけでは説明が及ばない複数の事例を捉えることができることを示す。

4 「古代日本語ラル構文のネットワーク」 志波彩子 (20 分)

本発表は、古代日本語のラルによる構文のネットワークを描くことで、前述の問題①②③について考える。ラルは、[非情物-ガ 自然発生 Vre-] (枝が折れる等) という自然発生的自動詞構文から、動作主含意行為動詞とともに用いるための文法的な接辞として取り出されたが、『源氏物語』に代表されるような視点内在的テキストによって有情者に視点を置いて「有情者(自分)に対して行為が自然発生する」という意味の構文として確立した。こうして視点内在テキストでは「《有情者視点👁️》 動作主含意行為動詞-ラル」というスキーマ構文から各下位構文(自発・可能・受身)が生まれたと考えられる。つまり、自然発生(ラル)と動作主含意(動詞)という意味の総和からは導き出されない「有情者(自分)に対して」という意味と形式(有情者主題)を視点内在テキストによってもたらされ、構文として確立していったと考える。これに対し、尊敬の一用法とされてきた主催構文(吉田 2019)は、変体漢文の影響を受けた中立的視点のテキスト構造の中で、動作主を背景化し出来事の生起を前景化して述べる構文として成立したものと考えられる。

5 「経路句を伴わない非選択目的語使役移動構文：英語動詞 wipe の場合に注目して」 貝森有祐 (20 分)

経路句を伴わない非選択目的語使役移動構文を取り上げ、前述の問題①③について考える。先行研究(Rappaport Hovav & Levin 1996)では、経路句を伴う場合にのみ、動詞が選択しない要素である<付着物>を目的語にできると考えられている(cf. Sandy wiped the crumbs off the table / *Sandy wiped the crumbs)。しかし、直接目的語として<付着物>が来ているにもかかわらず経路句を伴わない実例(I nodded and wiped my tears)も観察され、英語母語話者に容認性を尋ねると容認可能であると判断されることも多い。本発表では、経路句を伴わない wipe 非選択目的語使役移動構文の使用実態と特徴についてコーパス調査を中心に探ることで構文ネットワークの中でどのように位置付けられるか検討し、次のことを主張する。①I wiped my tearsのような表現は動能構文と両立可能であり、この点からすると使役移動構文というより他動詞構文(SVO 構文)カテゴリーに入る事例である。②それと同時に、[付着物-表面]のメトニミーが関与している点ではI wiped tears from my cheeksのような経路句を伴う非選択目的語使役移動構文と近く、非選択目的語使役移動構文の拡張事例としても見なせる。

6 質疑応答 (35 分)

【引用文献】 王安(2013)「主体化」森雄一・高橋英光(編)『認知言語学：基礎から最前線へ』くろしお出版、永谷直子(2015)「動作主認識の副詞的成分を再考する」『日本語文法』15-1、村上佳恵(2017)『感情形容詞の用法—現代日本語の使用実態』笠間書院、吉田永弘(2019)『転換する日本語文法』和泉書院、Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press., Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press., Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 1996. Two Types of Derived Accomplishments. In Miriam Butt and Tracy Holloway King (eds.) *The Proceedings of the First LFG Conference*. 375-388. Stanford: CSLI Publications.